

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	小澤 りえ
論文担当者	主査 池内 浩基
	副査 辻村 亨
	副査 山本 新吾
学位論文名	The eCura system as a novel indicator for the necessity of salvage surgery after non-curative ESD for gastric cancer: A case-control study (胃癌に対する非根治 ESD 症例における eCura システムの有用性)
論文審査の結果の要旨	
<p>早期胃癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術 (Endoscopic submucosal dissection : ESD) の結果、非治癒切除と判断された場合は、追加治療としてリンパ節郭清をとまなう胃切除術が実施される。しかしその多くは切除標本に癌遺残を認めず、結果的に過大治療となっている可能性が高い。本研究の目的は ESD 非治癒切除症例に対する手術適応症例の的確な絞り込み基準を明らかにすることである。非根治 ESD 症例で当科にて追加手術を行った 47 例を対象とし、外科切除検体での癌の局所遺残とリンパ節転移について調査した。また、癌遺残状態の予測因子を明らかにするため、ESD 検体での腫瘍径、深達度、リンパ・血管侵襲、組織学的断端、および組織学的診断、さらに最近提唱されたリンパ節転移のリスク指標である eCura スコアを、癌遺残陽性群と陰性群との 2 群間に分けて、両群を比較した。癌遺残の陽性例は 9 例 (19%) で、局所遺残は 6 例、リンパ節転移は 4 例に認め、うち 1 例が、両方を認めた。また、eCura スコアが高いと癌遺残率も高い傾向があり (p = 0.0128)、スコアは癌遺残の予測因子になりうると考えられた。特に、低リスク群 (スコア = 0~1 点) の患者では癌遺残は認められなかった。長期予後に関しては、4 年間の追跡期間中に癌再発は両群ともに認められなかったが、2 人の患者が肺炎で死亡した。非治癒性 ESD 症例で外科的追加手術を受けた患者の 80% 以上が癌遺残は陰性であった。ただし組織学的には中分化腺癌症例に eCura スコアに関わらず癌遺残症例が含まれていたことから、同組織型に対する経過観察の判断は慎重にすべきであると考えられた。</p> <p>以上より申請者は、eCura システムは、追加手術の妥当性を決定する際に有用である可能性がある、と考察している。本研究は早期胃癌に対する臓器温存治療として最近積極的に実施されており、その適応が拡大されている ESD の非治癒切除例に対する過大な外科介入を避ける意味で、臨床判断に重要な知見を与える臨床研究であり、学位論文に十分値するものと評価した。</p>	